

協働学習のための活動デザイン

-「ピア内省」活動の相互行為における内省促進の要因-

国際交流基金 日本語国際センター

専任講師 金 孝卿

「ピア内省」活動とは、

言語使用の体験を行った後、
その体験について
学習者仲間 (peer) と対話することによって、
個々人の内省を促す形の内省活動

体験学習における
「内省 (reflection)」
の重要性

協働学習としての
「ピア (peer)」との
相互作用の効用

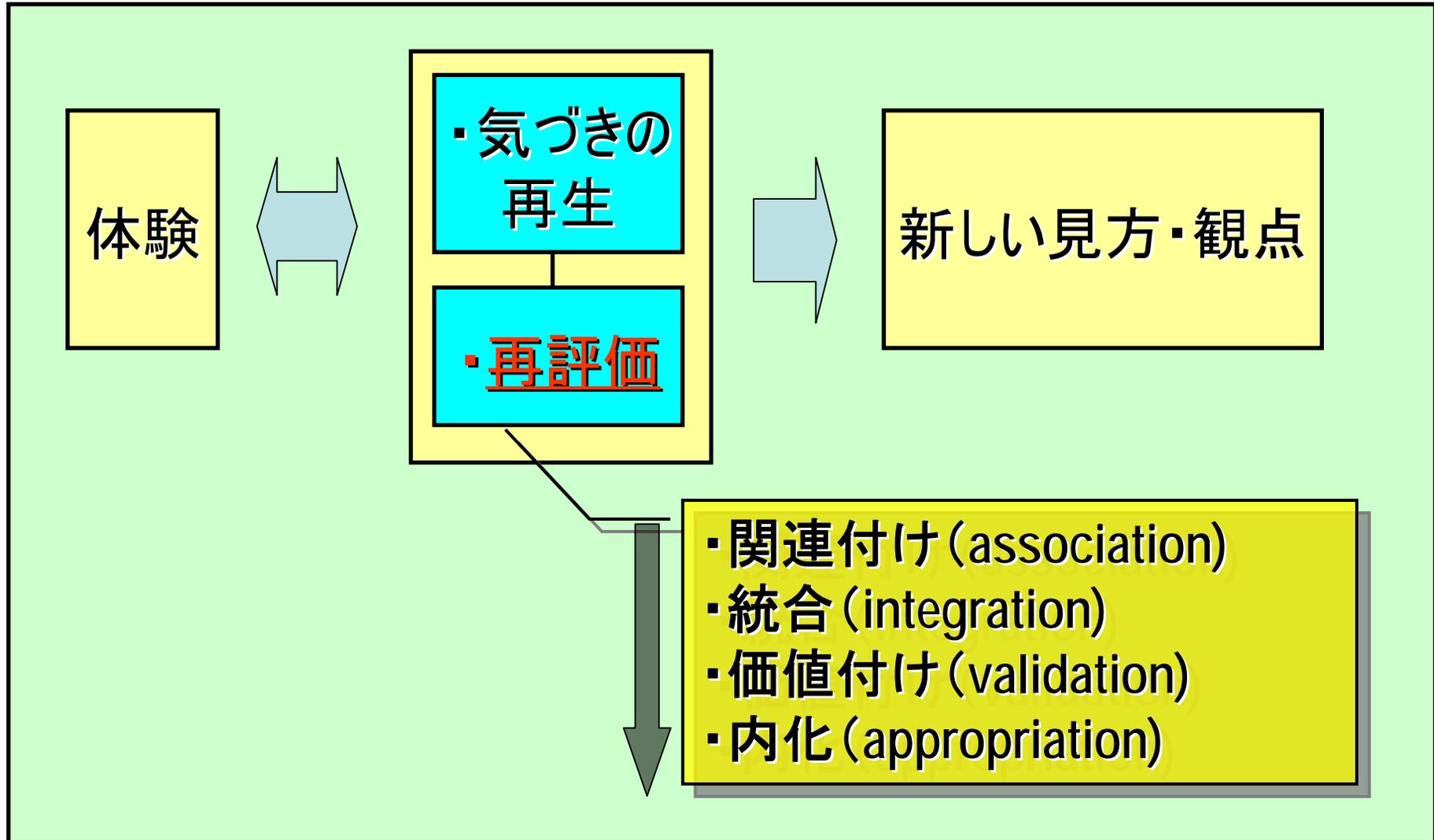
■ 依拠する理論的前提

体験や活動の中で、学びの主体が能動的に環境（物・情報・人）に働きかけ、既存の知識を駆使し、新しい知識を主体的に発見、生成していく→個別の観点生成

直接的体験に対する「**内省**」が重要な方法

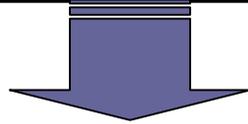
「自分の体験について新しい理解や評価を見出すために、その体験を対象とし、そこに何かがあるかを探る認知的・情意的活動」

■ 体験学習における「内省のプロセス」: Boudら(1985)



■協働学習としての学習者仲間(ピア)との相互作用の効用

- ・協働 (collaboration)・・・相互依存的・互惠的・創造的プロセス
: Lepper&Whitmore (2000:5), 舘岡 (2005:94-95)
- ・一方法としての「ピア」との対話による学習活動
: Boud他 (2001)



「ピア内省」活動・・・
学習者仲間(ピア)との対話によって、協働的に双方の
内省促進を図る教室活動

■言語学習者の「内省」を促すアプローチ:

セルフ内省

(1) 言語学習のプロセスに対する意識化促進に有効

: Nunan (1996), Donato and McCormick (1994)

(2) ・気づきレベルの個人差 (教師による介入が必要)

橋本 (1995)、山口 (2001)

・一人での内省の難しさ (他者とのコミュニケーション)

岩崎・山口 (1998)

→ ・他者としての学習者仲間に注目

・学習者双方の内省を促す活動デザインとは？

研究の目的

- ・「ピア内省」活動の相互行為は、学習者双方の内省促進に貢献できるかどうか。また、どのように貢献できるか。
- ・実際の相互行為における内省促進に関わる要因を明らかにし、協働学習のための活動デザインについて検討する。

3つの研究

研究1(金2004)

内省の観点の広がりと
深まりに、個人差がある

研究2(金2006b)

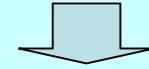
質疑・応答(口頭)では、
内省の観点が拡張される

研究3(金2006a)

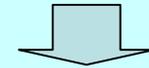
書く評価では、評価者自
身の内省を活性化できる

内省活動のデザイン案

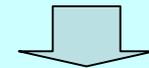
【0】言語使用の体験



【1】一人でできる内省活動



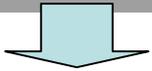
【2】他者の視点が提供され、
内省を活性化する活動



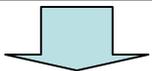
【3】もう一度、一人での
内省で深める

研究方法

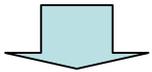
スピーチ



セルフ内省①



ピア内省



セルフ内省②

【セッション①】

スピーチの内容確認(話し手・聞き手)

【セッション②】

より良いスピーチのためのアドバイス
(口頭・書く)

分析データ

- ・2000年4月～7月
- ・中/上級聴解・会話クラス(12回/90分)
- ・中級～上級日本語学習者、4組(8名)
- ・「**セルフ内省①②**」の文字資料
「**ピア内省**」の話し合い(文字化)資料

対象クラス: 研究留学生・日本語日本文化研修生・交換留学生
多国籍(10名～12名)

授業体制: 日本語母語話者教師とのチーム・ティーチング

分析観点

・「ピア内省」活動の相互行為において、内省促進に関わる要因は何か。

- (1)「ピア内省」の前後に実施した「セルフ内省①②」において、内省促進（観点の広がりと深まり）は実現されるか
- (2)「セルフ内省」での内省促進の有無は、「ピア内省」での参加の仕方と関係しているか

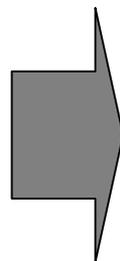
(1) S2の「セルフ内省」での変化

セルフ①

ピア内省

セルフ②

- ・たまに間違えた表現がある
- ・自分の声を聞くのが恥ずかしい
- ・何故自分のことが嫌いなのか説明していない

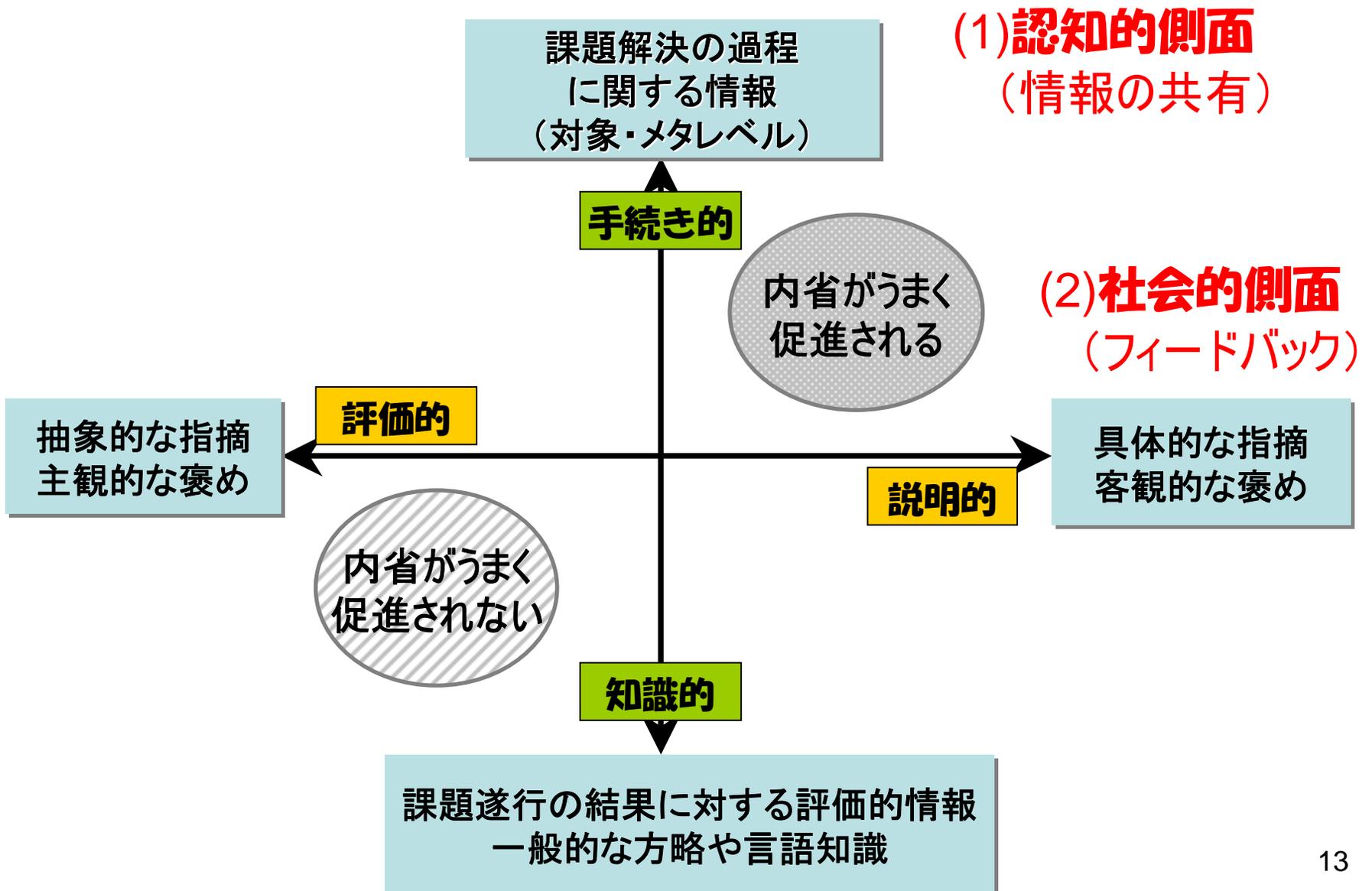


- ・ポーズとか強調するところがないからすぐわかってもらえなかった
- ・普通の会話とスピーチとの違いを考えずに話していたのだ
- ・適当なところで切れ目を置いたほうがいいと思う

表現・感情体験・構成

聞き手の理解＋タスクの特徴
＋タスク遂行上のスキル

(2) 相互行為における内省促進に関わる要因:



「共有される情報の種類」と内省促進のプロセス

うまく促進される

- 【1】「スピーチ」の産出/
理解過程に関する
情報
- 【2】課題に関する情報

VS.

うまく促進されない

- 【1】「スピーチ」の結果
に関する評価的信息
- 【2】一般的な方略や
知識に関する情報

- 【1】スピーチ理解上の**ズレ発見**
- 【2】発話時の思考プロセスに
関する**気づき**



**個人の課題へ
焦点化**

内省がうまく促進される場面

【1】

S2: 何が言いたいかわかる？

S1: どうかなあ。今、自分のことがそんなに好きじゃないけれども、好きになりたい？なぜかという、周りの人に、もし自分のこと好きじゃなかったら、周りの人との関係が、何だろう、心の中では自分が好きだと思っているんですが、そう言えない、そう言っ
てた？そうじゃない？

S2: うーん、やっぱりもう一度(テープを)聞きたい。～中略～

S1: もう一つポイント、なんだろう。愛させるのは…

S2: うん、つまり、自分のことを愛せないのに、どうやって人のこ
とが愛せるの？ということが言いたかった。～中略～

S2: 説明が足りなかったかな。

S1: どうだろう、こういう、繋いで、繋いで、ポーズがない？だから、
ずっと繋いでいて、うまいんですが、何かstress、何だろう、強
調するところが必要？

S2: うーん…

スピーチ産出/理解上の
ズレ発見

【2】

S1:ここに終わったらいいと思いま
再生)うん、この文章が、これ

S2:違っているとは言えないでし

S1:でも、本当に、めちゃくちゃ。

S2:そんなことないよ。「~と思

S1:でも、なぜ、「と思います」じゃなかったかというと、この文章ね、
「と思います」で終わっているから、また「と思います」といつた
ら、だめだと思って、急にポーズ、ポーズ...

S2:うーん、同じ表現を繰り返すとね、なんか、おかしいかもしれな
いけど、でもこの場合はそう言ってもよかったよね。ああ、話な
がらもそういうのを考えるんだ。すごーい、ですね。わたしね、
話はじめると、頭の中が真っ白になるの。ばーつと話して、後で
考えたら、おかしいなと思う。せつがちになるの、自分が。

・発話時の思考プロセスに関
する**気づき**

→先行情報との関連付け

→自分の課題への焦点化

まとめと考察

- 「ピア内省」の相互行為は、学習者双方の内省促進(新たな観点の生成)に貢献できる。

協働的な相互作用のための条件

- ・ 認知的側面：
「**共有情報の質**(課題解決過程)」
 - 認知上のズレ発見、
自己課題へ焦点化
- ・ 社会的側面：
「**具体的な指摘・褒め**」
 - 評価の根拠、自己開示

タスクの機能

- ・ 対象タスクの種類：
普段は言語化されない
話し手・聞き手の認知プロセス
- ・ ゴールを特定化しない話し合い：
意味交渉のための社会的
関係性の構築が活発になる

→ 「ピア内省」活動の2つのセッション(内容確認／アドバイス)
: 意味のある情報共有のための場づくり

今後の課題

- ・「ピア内省」活動における、認知的側面/社会的側面の働きの詳細な分析。タスクのタイプとの関連性の解明。
- ・日本語力の格差がある場合の教師の介入の仕方
教室内でのT-S/S-Sの相互行為、両者の有機的関連性
- ・内省促進と言語パフォーマンス向上との関係

内省がうまく促進されない場面

【1】

～前略～

S7: ああ、でも最初のところは分かりましたか。

S8: うん、けど、けど。

S7: 私が聞いたら、あまりはつきりしていないと思う。相手が聞いたら、
わかりづらい。

S8: どの部分？

S7: 最初、どうして私が嫌いか…

S8: 落ち込んで？… (S7のテープ再生) うんうん、分かりました。

S7: わかった？ ああ。

ズレ発見無し

【2】

S7:発音は外国人ぽい。文章的には、文章になっているけど、正しい文章になっていないところもある。うーん、で、スムーズに話していない。途切れるし、「あのう」が一杯あるし。自分が言っていることを自分で直している。私、落ち込む、辞書？辞書的？

S8:ああ、基本形ですね。

S7:そうそう、すごくそれがあると思う。

S8:でも、すぐ直すから大丈夫だと思う。

S7:でも、聞いている人は、すこし「何を話しているんだろう」と思うかもしれない。

S8:すぐわかりますから。大丈夫ですよ。

S7:私が話しているとき、「わたし」が多すぎると思う。わたし、日本来て、日本人は「わたしは」あまり言わない。でも、いっぱい。

S8:そうですね。韓国語でも「わたし」はあまり使わないですね。でも英語は違いでしょ？だから、そうかもしれない。

S7:うーん、だから自然じゃないと気づきました。

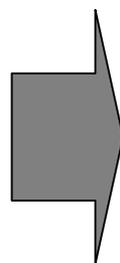
(1) S7の「セルフ内省」での変化

セルフ①

ピア内省

セルフ②

- ・「あの一」が多すぎ
- ・とぎれる
- ・発音が外人ぽい
- ・正しい文章になっていない
- ・スムーズじゃない
- ・自分で自分を直す
- ・「私」が多すぎる？



- ・じょしを強調しないように、例えば「わたしは↑」

話し方の癖・発音・流暢さ・文法

話し方の癖

•Lepper&Whitmore (2000) :「協同」

社会心理学的視点→「合同作業や一緒に作業すること」

- ①同調 (coordination): 個々人・共通目的・協力/競争
- ②協調 (cooperation): 共有された目標・各自の領域
- ③相互介入としての協同 (collaboration):
共有された目標・相互介入の度合いが高い

•館岡 (2005)

- ④協働 (collaboration): 相互依存的, 互惠性, 創造的

参考文献

- 金孝卿(2004)「日本語(話す・聞く)教室における「内省的活動」の可能性－教室活動のタイプと意識の表れの関係に関する一考察－」、『言語文化と日本語教育』27号、197－209
- 金孝卿(2005)「協働学習のための活動デザイン-「ピア内省」活動における創発的学習の実態から-」『共生時代を生きる日本語教育-言語学博士上野田鶴子先生古希記念論集』凡人社 183-202
- 金孝卿(2006a)「第二言語としての日本語教室における内省活動の研究-「ピア内省」を組み込んだ活動デザインの提案-」お茶の水女子大学 人間文化研究科 博士論文(未公刊)
- 金孝卿(2006b)「研究発表の演習授業における「質疑・応答」活動の可能性－発表の内容面に対する「内省」の促進という点から－」『世界の日本語教育』16号、89-105
- 久保田賢一(2000)『構成主義パラダイムと学習環境デザイン』関西大学出版部
- 三宅なほみ(1985)「理解におけるインターアクションとは何か」『理解とは何か』東京大学出版局
- Boud,D., Keough, R. and Walker, D.(eds)(1985) *reflection : turning experience into learning*. London: Kogan Page.
- Boud,D.,Ruth Cohen and Jane Sampson(eds)(2001) *peer learning in higher education*.
- Lepper, Mark R. & Paul Whitmore (2000)「協同－社会心理学的視点から」『協同の知を探る－創造的コラボレーションの認知科学－』植田一博・岡田猛編著 共立出版 2-8 23